

テーマ	授業 UD の視点から捉える「フェアな指導過程」 —教科授業・学級活動・日常生活を貫く教育デザイン—
発表者 (所属)	川上 健治 (明石市立高丘西小学校)
【発表概要】 本発表では、授業 UD における「安心・参加」の視点を学校生活全体へと拡張し、単に児童が「参加できたか」だけではなく、「どのように関与できたか」という関与の質に着目する。そのための教育デザインとして、児童一人ひとりが正当な成員として関与できる教育過程を「フェアな指導過程」と捉える。 さらに、「フェアな指導過程」を具体的に捉え、その過程を省察するための枠組みとして、FAIR 省察サイクルを提案する。FAIR は、F (Fair Participation : 正当な参加), A (Acceptance of Differences : 異なる考え・立場の包摂), I (Informed Reasoning : 根拠にもとづく検討), R (Reflection : 過程の省察) の四つの視点から構成される。これらを循環的に捉えることで、児童自身が学びや活動への関わり方を振り返り、次の関与へとつなげていくことを目指す。 発表では、教科授業・学級活動・日常生活の三つの教育場面を取り上げる。教科授業では国語科「やまなし」における読みの交流、学級活動では話し合い活動、日常生活では普段の児童の具体的な姿を示し、それぞれの場면을 FAIR 省察サイクルの視点から検討する。活動の内容や場面は異なっても、「自分も参加できた」「異なる考えでも受け入れられた」「自分の考えが正当に扱われた」と感じられる一貫した関与経験を保障することが、学校生活全体を貫く教育デザインになり得ると考える。 以上を通して、授業 UD の「安心・参加」を、学校生活全体における「関与の質」へと展開する可能性を示す。そして、こうした関与経験の継続的な蓄積が、「存在の安心感」「関係的受容感」「正当な関与感」というウェルビーイングの素地の形成を支える可能性について考察する。	